

【共同研究】

## 青年と両親の家庭雰囲気の関係における時代的变化 多母集団同時分析を用いて

本田時雄\* 岡林秀樹\*\*

### Chronological Changes of Dyadic Relations of Family Atmospheres among Adolescents and their Parents : Using Simultaneous Analysis of Several Groups

Tokio HONDA Hideki OKABAYASHI

This study aimed to examine chronological changes of dyadic relations among of family atmospheres (FAs) that adolescents and their parents held from 1990 to 2000. Pair-data from three sources, university students and their fathers and mothers, were collected in 1990 (n=73) and in 2000 (n=118). Simultaneous analysis of several groups was conducted to clarify chronological changes of causal relations among five FAs: those of family of orientation (FO) that fathers and mothers held, those of family of procreation (FP) fathers and mothers held, and those of FO children held.

Main results were as follows:

- 1) While there was only one significant influence from FA of FO to FA of FP that fathers held in 1990, there were significant ones from FA of FO to FA of FP that both parents held in 2000.
- 2) While mothers' FA of FP was slightly affected only by fathers' one of FP in 1990, conversely fathers' one of FP was greatly affected by mother' one of FP in 2000.
- 3) Both parents' FA of FP had similarly significant influences over students' one of FO in both 1990 and 2000.
- 4) It was concluded that while the effects of paternal lines on transmission processes of FAs among three generations have been decreasing, those of maternal lines have been increasing in these ten years, which corresponds to social and cultural changes in Japan.

#### 目 的

1990年から2000年までの間には、阪神大震災、サリン事件、女性の社会進出、リストラ・失業など、さまざまな出来事が起こってきた。

---

\* ほんだ ときお 文教大学人間科学部臨床心理学科

\*\* おかばやし ひでき 明星大学人文学部

このような社会変動に伴って家庭内の親子関係にもさまざま変化が起きていることが予想される。本研究グループは、これまで母親像や家庭雰囲気などについて青年とその父母のペアデータを用いて、世代間伝達について検討してきた(本田・大熊, 1998; 本田・岡林, 2000)。本研究では、1990年と10年後の2000年に収集した男女大学生とその父母のペアデータを用いて、父・母・子のそれぞれが抱く家庭雰囲気との相互関係の時代的推移を明らかにすることを目的とする。このような2つの異なる時代における親子関係の変化を検討するために共分散構造分析の多母集団同時分析(Arbuckle & Wothke, 1995-99)を用いた。

人)とその父母の3者に調査を行って回答を得た(1990年の調査に関しては本田・岡林(2000)を参照のこと)。2000年に同様の調査を行い、大学生(男子31人、女子86人、不明1人)とその父母の3者から回答を得た。これらの調査の回答者を本研究の分析対象者とした。

### 方 法

#### 分析対象者

1990年に、大学生73人(男子25人、女子48

#### 測 度

調査項目は「家庭雰囲気」SD法スケール、9項目について、1990年に調査を実施した群と2000年に調査を実施した群、それぞれ別々に因子分析(主成分分析後、クォーティマックス回転)を施して2因子を抽出した。第1因子で両群とも共通して高い因子負荷量を示した「暖かい 冷たい」「仲の良い 仲の悪い」「幸せな 不幸せな」の3項目を、「くつろぎ」という家庭雰囲気構成する観測変数として採用した。

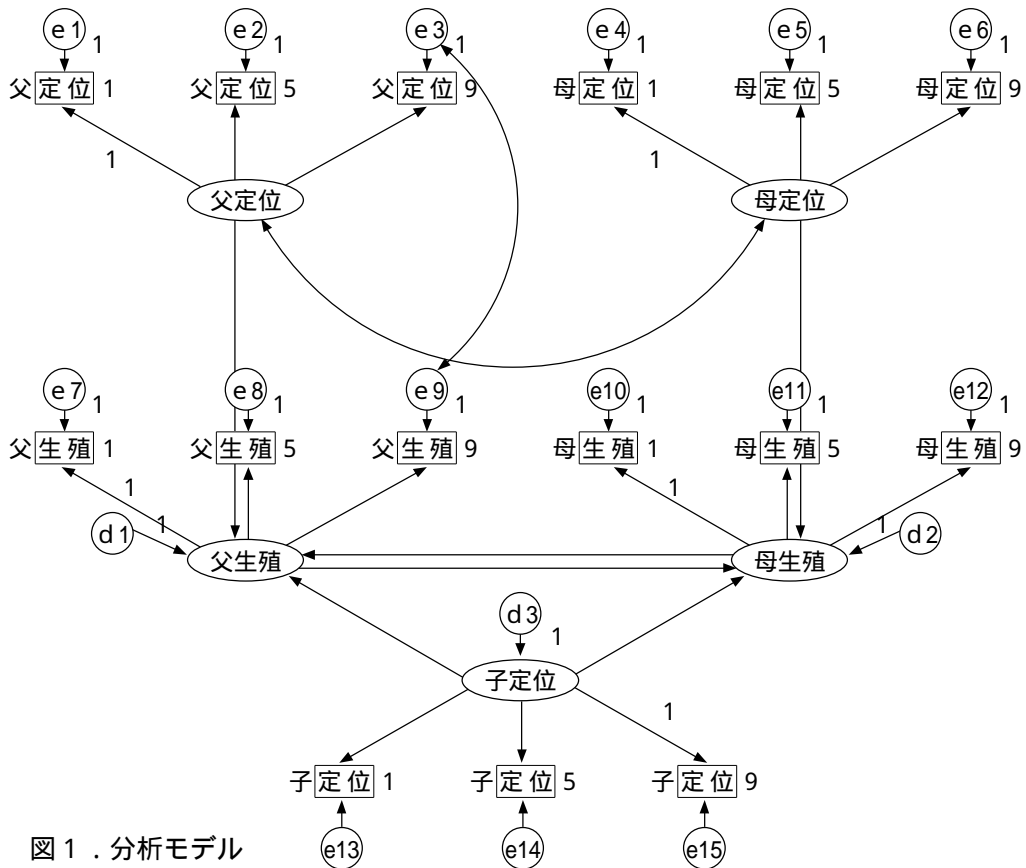


図1. 分析モデル

分析モデルの構築 (図1)

父の定位家族、母の定位家族、父の生殖家族、母の生殖家族、子どもの定位家族、という5種類の家庭雰囲気の関係を表す図1のようなモデルを構築した。図中の父の生殖家族、母の生殖家族、子どもの定位家族は、実際に親子が生活している家族に対する父、母、子それぞれの抱く家庭雰囲気を示している。図1では、父母の抱く定位家族の雰囲気は父母の抱く生殖家族の雰囲気に影響を与えること、父母の抱く生殖家族の雰囲気は互いに影響し合うこと、父母の抱く生殖家族の雰囲気は子どもの抱く生殖家族の雰囲気に影響を与えること、が仮定されている。なお、修正指標により父の定位家族と父の生殖家族の観測変数間(e3とe9)に誤差相関があることが示唆されたため、この誤差相関のパスが加えられた。このモデルに基づいて家族雰囲気の関係の時代変化を共分散構造分析の多母集団同時分析法 (Arbuckle & Wothke, 1995-99; 狩野1997; 豊田, 1998) で検討した。

結 果

モデルの検討 (表1)

モデル1: 1990年と2000年の2グループの分析モデルの構造が等しいことを仮定したモデル (モデル1) を検討した。このモデルにおいては、標準化された因子負荷は.60以上の値を示しすべて有意であった。またすべての観測変数の誤差分散は正の値を示し、かつ有意であった。モデルの適合度に関しては、 $\chi^2$ 値は有意ではなく( $\chi^2(164)=188.019, ns$ ) GFI が.889、AGFI が.837の値を示していた。

これらのことから、このモデルの妥当性はある程度は維持されたと考えられる。

モデル2: 次いで、両群における因子負荷が等価であるという制約を課したモデル (モデル2) を構築した。このモデルにおいては、モデル1と同様に、標準化された因子負荷は.60以上の値を示しすべて有意であった。またすべての観測変数の誤差分散は正の値を示し、かつ有意であった。モデルの適合度に関しては、 $\chi^2$ 値は有意ではなく( $\chi^2(174)=198.218, ns$ ) GFI が.885、AGFI が.842の値を示し、このモデルの妥当性はある程度維持されたと考えられる。モデル1とモデル2の $\chi^2$ 値の変化を検討した結果、有意な差異はみられず( $\chi^2(10)=10.199, ns$ ) 2群における因子負荷が等価であることが示され、このモデルは受け入れられる。

モデル3: 潜在変数間のパスが2群で等価であるという制約を課したモデル (モデル3) を構築した。このモデルにおいては、標準化された因子負荷は.60以上の値を示しすべて有意であった。またすべての観測変数の誤差分散は正の値を示し、かつ有意であった。モデルの適合度に関しては、 $\chi^2$ 値も有意に大であり( $\chi^2(180)=212.696, p<.05$ ) GFI が.876、AGFI が.836の値を示し、このモデルの妥当性は低いことが明らかになった。モデル2との $\chi^2$ 値の変化を検討した結果、有意差がみられ( $\chi^2(6)=14.751, p<.05$ ) 潜在変数間のパスには時代差があることが示唆された。

表1 3つのモデルの適合度

モデル	GFI	AGFI	$\chi^2$ 値	df	p	$\chi^2$ 値 の変化	df	p
モデル1(制約なし)	.889	.837	183.019	164	ns	10.199	10	ns
モデル2(制約は因子負荷)	.882	.838	198.218	174	ns			
モデル3(制約は因子負荷 + 潜在因子間のパス)	.876	.839	212.696	180	p < .05	14.751	6	p < .05

## 青年とその父・母の家庭雰囲気の関係の時代比較

1990年と2000年という2つの時代における因子負荷が等しいという制約を課したモデル2において、潜在因子間の関係を比較したところ(表2、図2、図3) 両時代ともに、父の定位家族から父の生殖家族(1990年: .485,  $p < .01$ ; 2000年: .271,  $p < .01$ ) 数値は標準偏回帰係数) 父の生殖家族から子の定位家族(1990年: .401,  $p < .01$ ; 2000年: .374,  $p < .01$ ) 母の生殖家族から子の定位家族

(1990年: .339,  $p < .01$ ; 2000年: .283,  $p < .05$ )へは共通して有意な正の効果がみられた。一方、母の定位家族から母の生殖家族へは2000年には有意な正の効果がみられたが(.518,  $p < .001$ ) 1990年には有意な効果はみられなかった(.202, ns) 父母の生殖家族の雰囲気間関係について、1990年は父から母へ弱い正の効果だけが認められた(.582,  $p < .10$ )が、2000年には逆に母から父へ有意な正の影響(.454,  $p < .01$ )がみられ、父から母への影響は認められなかった。

表2 父, 母, 子における家庭雰囲気の関係の時代比較

時代	標準偏回帰係数 (偏回帰係数)					
	父定位 父生殖	母定位 母生殖	父生殖 子定位	母生殖 子定位	父生殖 母生殖	母生殖 父生殖
1990年 (N = 73)	.485** (.372)	.202 (.141)	.401*** (.480)	.339** (.483)	.582† (.479)	-.357 (-.435)
2000年 (N = 118)	.271** (.245)	.518*** (.425)	.374** (.611)	.283* (.427)	.216 (.419)	.454** (.216)

(† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )  
(「定位」は定位家族、「生殖」は生殖家族の略)

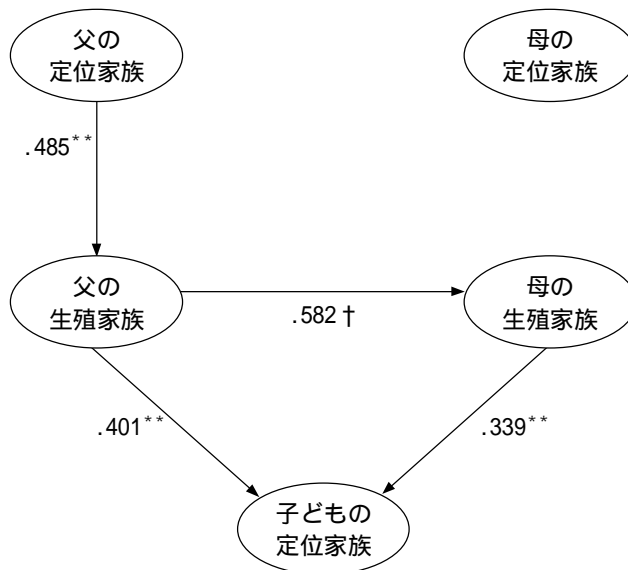


図2 . 1990年の父、母、子の家庭雰囲気の関係

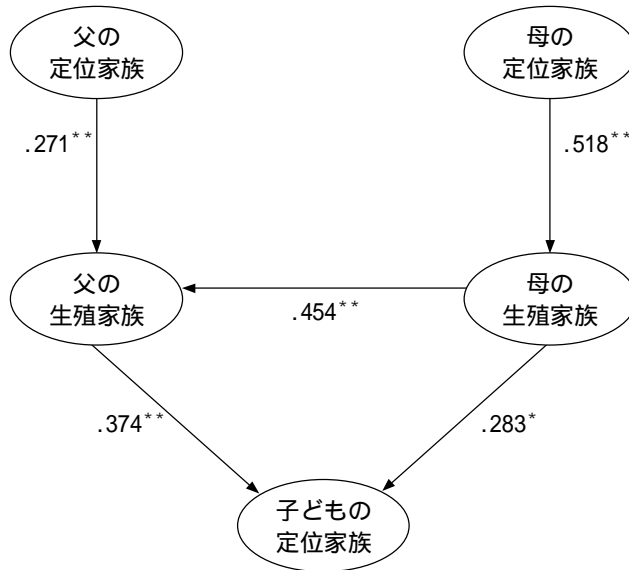


図3 . 2000年の父、母、子の家庭雰囲気の関係

子どもの定位家族への総合効果を検討してみると(表3) 父の定位家族の家庭雰囲気から子どもの定位家族の家庭雰囲気への総合効果が1990年には.240だったのが、2000年

には.131と減少した一方、母の定位家族の家庭雰囲気から子供の定位家族への家庭雰囲気への総合効果が、1990年には.033だったのが、2000年には.260と増加していた。

表3 父母の定位家族および生殖家族から子どもの定位家族への総合効果

時代	父定位 子定位	母定位 子定位	父生殖 子定位	母生殖 子定位
1990年 (N=73)	.240	.033	.495	.161
2000年 (N=118)	.131	.260	.483	.502

### 考 察

本研究では、1990年と2000年における大学生とその両親の家庭雰囲気に関するペアデータに基づいて、家族関係の時代的变化を明らかにすることを試みた。モデルの適合度の検

討から、大学生とその父母の抱く家庭雰囲気は、1990年と2000年という2つの時代において因子負荷は等しいことが示されたが、5つの潜在因子(父、母および子の抱く家庭雰囲気)間には時代差があると考えられた。そのため、因子負荷が2つの時代で等しいと

いうモデル(モデル2)を用いて、大学生とその父母の抱く家庭雰囲気の関係について時代比較を行った。(厳密に考えると、両グループの履歴効果も考慮すべきであろうが、ここでは調査時点の1990年と2000年との10年間の社会的および文化的変化の影響を中心に考察する。)

2つの時代における家庭雰囲気の関係と比較したところ、母親が抱く生殖家族の雰囲気は、1990年には父親が抱く生殖家族の雰囲気によって影響を受けているが、母自らの生まれ育った家庭(定位家族)からの影響はみられなかった。つまり、この世代の女性にとっては、配偶者として選んだ男性のもつ家庭雰囲気によって、自分自身の家庭雰囲気のイメージも決められてしまうのである。しかしながら、2000年においては母の抱く生殖家族の雰囲気は、母の定位家族の雰囲気からの影響も受けている。さらに、父が抱く生殖家族の雰囲気は、父の定位家族の雰囲気から影響を受けるとともに、母の生殖家族の雰囲気からも影響を受けている。すなわち、2000年には、1990年とは逆に父親のもつ家庭雰囲気のイメージが母親のそれから影響を受けるようになってきていた。

さらに、子どもへの影響を考えた場合、両親の抱く生殖家族の雰囲気は両時代ともに父母それぞれが子どもの定位家族の雰囲気に直接影響を与えているが、それに加えて配偶者を介して子どもに間接的な影響を与えている。しかしながら、その影響を与える方向性が時代によって異なっており、1990年には父から母を介して子どもに影響を与えていたのが、2000年には逆に母から父を介して子供に影響を与えるようになっている。このことは、時代とともに、父の定位家族の雰囲気が子どもの抱く定位家族の雰囲気に与える総合効果が減少し、逆に母の定位家族の雰囲気が子どもの抱く定位家族の雰囲気に与える総合効果が増加したことから明らかになった。これらのことから、この10年間に子どもの抱く家庭雰囲気に対しては、父系の影響力よりも、母

系の影響力が増大したと結論づけられよう。

朝日年鑑によって1990年から2000年までの10年間の日本の時代変化を概観すると、1980年代の高度経済成長期には、父親は以前にも増して仕事人間となって、子どものしつけ・教育を母親に任せていた。その頃ウーマンリブがはなやかになったが、母親はまだ旧来の「イエ」の考え方に縛られていた。1990年代になるとマイナス面が多く現れ、「失われた10年」と呼ばれることもある。すなわち経済は1993年あたりから「どん底」と言われ出し、95年には阪神大震災と地下鉄サリン事件が勃発した。また92年ごろから「セックスレス」という言葉が流行しだした。これは大家族制度が崩れ、86年の「男女雇用機会均等法」が制定され、女性が社会へ出るようになり、さらに90年代後半になると労働時間短縮やリストラによって中年男性の自殺が増加し男性の地位は低下したが、他方女性のそれは上昇した。そして子どもは「謎(かすがい)」というよりも足手まといと思われることが多くなった。すなわち、この10年間に生じたマクロレベルの社会変動がメゾレベルおよびマイクロレベルの家族内部の関係に及ぼした影響(Thomas, 1999)としては、イエ制度が崩壊し、「嫁入り」が「結婚」にとって変わり、親と同居するにしても母方の親との同居が増大したことが示唆され、このことは本研究で得られた父系の影響が減少して母系の影響力が増大したことの背景要因と考えられる。

家族関係については、大下・亀口(1998)は、同時期におけるウイグル族と日本の家族の子どもからみた両親イメージの差異を「家族イメージ法」によって求めている。次いで1999年には父・母・子の3者関係をやはり「家族イメージ法」によって検討している(大下・亀口, 1999)。しかしながら、いずれの場合も調査対象者が子どものみであり、父と母は回答しておらず、夫婦の微妙な関係は把握しにくいと考えられる。このように、我が国においては、親子の3者の関係を、それぞれの対象者に回答を求めたデータを収集し

(ペアデータ) それらの関係を検討した研究はまだ少ない。また亀口(2000)は、臨床的知見から、世代に関して祖父母世代を「儒教文化世代」、親世代を「欧米世代」、子ども世代を「電子文化世代」と命名し、世代と文化の関係を問題にしている。

本研究では、限定されたサンプルではあったが、家族関係の時代変化を父、母、子という3者のペアデータを用いて実証的に明らかにすることを試みたものである。今後、ペアデータに基づいた親子関係の時代変化・文化による差異の検討が望まれる。

### 要 約

本研究は、青年とその両親が抱えている家庭雰囲気の関係の1990年から2000年における時代的变化を検討することを目的とする。青年、彼らの父、彼らの母という三つのソースからのペアデータ1990年(N=73)と2000年(N=118)に収集された。5つの家庭雰囲気の原因関係の時代変化を明らかにするために、多母集団同時分析が用いられた。5つの家庭雰囲気とは、父母の抱く定位家族の家庭雰囲気、父母の抱く生殖家族の家庭雰囲気、子どもの抱く定位家族の家庭雰囲気のことである。

主要な結果は、以下のとおりである。

1) 1990年は父の定位家族の家庭雰囲気から父の生殖家族の家庭雰囲気への影響しかなかったが、2000年には父母両方において定位家族の家庭雰囲気から生殖家族の家庭雰囲気へ有意な影響が見られた。

2) 1990年は、母の生殖家族の家庭雰囲気は、父の生殖家族の家庭雰囲気からのみ弱い影響を受けていたが、2000年は、これとは逆に、父の生殖家族の家庭雰囲気は母の生殖家族の家庭雰囲気から強い強い影響を受けていた。

3) 父母の生殖家族の家庭雰囲気は1990年も2000年も子供の定位家族の家庭雰囲気に対して同様の影響を及ぼしていた。

これらのことから、この10年間に、3世代にわたる家庭雰囲気の伝達過程に対して、父系の影響力が減少する一方、母系の影響力は

増大する傾向が見られ、このことは日本における社会的・文化的変容と対応していると結論づけられる。

### 文 献

- Arbuckle, J.L. & Wothke, W. 1995-99  
Amos.4.0 User's Guide. Small Waters Corporation  
朝日新聞社 1985-2000 朝日年鑑  
本田時雄・大熊康彦1998 ペアデータ分析の試み  
(1) 文教大学人間科学研究, 第20号, 113-122  
本田時雄・岡林秀樹 2000 ペアデータ分析の試み(2) 共分散構造分析を用いた世代間伝達の分析事例 文教大学人間科学研究, 第22号, 219-226  
亀口憲治 2000 家族臨床心理学: 子どもの問題を家族で解決する 東京大学出版会  
狩野 裕 1997 AMOS, EQS, LISRELによるグラフィカル多変量解析 現代数学社  
大下由美・亀口憲治 1998 ウイグル族と日本の家族イメージの比較研究: 両親イメージの差異 家族心理学研究, 第12巻, 41-52  
大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究 父・母・子の3者関係イメージ 家族心理学研究, 第13巻, 1-13  
Thomas, R.M. 1999 Human Development Theories: Windows on Culture. Sage Publications  
豊田秀樹 1998 共分散構造分析 [入門編] 構造方程式モデリング 朝倉書店